

南沿海地方の古代鉄器文化（翻訳）

進藤義彦

目次

訳者まえがき

第一 「シベリヤ史」からの抜粋

第二 沿海地方の考古学遺跡の絶対・相対年代に占めるペスチャヌイ半島古代居住地の地位

第三 ペスチャヌイ半島出土セルトの組成の分析結果

附図 南沿海地方古代遺跡分布

訳者まえがき

一九六八年ソ連邦公刊「シベリヤ」史の中の「初期鉄器時代のシベリヤ」の章は、東アジアの鉄器文化に関心

ある人達にとって非常に興味ある記述だと思われる。要約すると、南沿海地方では既に、B、C、一千年頃に鉄が使われていたと言うのである。そうだとすると従来の極東鉄器文化の通説が相当に変えられなければならないと思われるので、更に細部資料を検討した上でシベリヤ史の記述を確かめたいと思ひ、一九五六年と六〇年の二回に亘ってソ連の研究者が行なつた、ベスチャヌイ半島（以下、ペ半島と略記）古代居住地の発掘に関するア・ペ・オクラドニコフの報告を主に翻訳を試みた。紙幅の関係上、主として鉄器文化に関係ある部分の抜粋にとどめた。本文中の括弧内の見出し、傍点並びに附図は訳者による。片仮名ルビは原文のロシア音を示す。

第一 「シベリヤ史」からの抜粋

シベリヤ大部の諸種族がそれ自身の青銅器時代を経つつあり、銅や青銅の金属が労働用具の主材料となつていたというのに、沿アムール地方と沿海地方の住民の間では、B、C三千年紀と二千年紀の境目以後に独特の状態が作られた。この地方では例えばザバイカル地方、ミヌス或いはアルタイ地方のように豊富で採掘容易な銅産地が無いため、相当遅くまで石器が使われていた。だが同時にまた非常に早くから鉄製労働用具の使用が始まり、独特の黒色冶金工業が起つた。（一卷「青銅器時代の極東」P. 218）

B、C二千年紀末から一千年紀初期にかけて、沿海・沿アムール地方には新しい工業時代の金属たる鉄が普及しつつあった。鉄が我が極東に現われたのは全く突然であつたばかりでなく、セミピャトナヤ滝（訳註：ハンカ湖附近）の下から出た炭素の放射性分析によると意外に早くて、B、C十世紀以前である。鉄使用の最初の兆候はシデ

ミンスク文化（訳註：アムール湾に注ぐシデミ河の名に由る）、言い換えると「貝塚文化」又は「南沿海地方文化」の居住地と関連がある（訳註：以下末尾の附図を参照されたい）。

シデミンスク文化もしくはこれに類似の文化の遺跡に出くわすのは海岸沿いの沿海地方であって、河口附近、岬或いは地峡、海岸近くの島々に多い。特に多くの居住地の発見されたのはアムール湾岸とウスリ湾岸である。初期鉄器時代のこの種居住地で極東ソ領内最西端のものはポシエト湾のエクスペディツィヤ入江である。東部海岸では、貝塚を伴う居住地がオルガ湾地区に、また内陸部ではマイ河と綏芬河（スベフン）の流域に見られる。……中略……何よりも重要なのは初めての鉄器の発見である。それは直角断面の鋳物（非鍛造品）のセルトで、この種の斧の出たのはペ半島並びにノヴォネジノ村附近のマールヤポドゥシエチカ丘である。……中略……

シデミンスク文化に代って新しいチャピゴウ文化がやって来る。マイヒンスキとない農場附近の居住地のチャピゴウ文化人の住居は、シデミンスク型陶器を伴出した住居遺跡との間に明瞭な区切りをつけている。チャピゴウ文化の居住地は沿海地方の数多くの場所（例えばセミヒャトナヤ溪谷）で発見されたが、東部沿海地方でこの遺跡のグループに属するのはソコリチ村の居住地の低層とスズヘ河口左岸の居住地である。これらの居住地は、放射性炭素分析によるとBC十世紀（2130±80）のものと推定される。……中略……

これらの居住地の住人はまだ円形断面の柄で判別される独特の型の石斧を用いていたが、そこではシデミンスク文化の居住地におけるよりも遙かにしばしば鉄に出くわす。……中略……

この頃沿海地方には多分、まっ先に豆満江対岸から新しい住民がはいって来たに違いない。だがこの種族はそれ以遠（ウスリ河谷やアムール地方）には拡がらなかったであろう。ウスリと沿アムール地方では、或る特徴につ

いてはシデミンスク文化に近いが、これとは全く異なる遺跡によって鉄器時代の始めが見られる。これは中部アムールのウリーリスク文化である。そしてこのあとに、今度は沿海地方においてチャピゴウ文化に取って代る遺跡と同起源で殆んどそれと同様の別の遺跡が続く。この型の最も特徴的な居住地はアムール療養所近傍、コムソモルスクナアムール近くのコンドン、ユダヤ自治州クケレヴォ村近くのポリツォ地区におけるそれである。

東部沿海地方でこれに關係するのは、アヴァクモノフカ河左岸のオルガ部落近くの「青い断崖」とポペリカ村附近のスズヘ河谷にある居住地並びにマールヤポドゥシェチカ居住地の上層、綏芬河々畔ウスリスク市近くのセニキナヤシャプカでの出土品である。全てこれらの居住地は、BC千年紀後半に沿アムール・沿海地方を支配した同種族の大集団のものに違いあるまい。

これらの種族は従前どおり半地下型の住居から成る聚落に住んでいた。鉄加工は繁栄を誇った。ソコリチ居住地出土のものには例えば鉄滓、鉍石、鉄鉍塊破砕用の石槌がある。代表的な労働用具として、斧、セルト、鎌、シャベル、鉋、小刀、やすの穂がある。「青い断崖」ではまた、鉄鏃、鉄小刀の破片その他が、アムール河畔ポリツォ居住地ではおびただしい数の鎧の札や大型セルトまでが出た。……中略……

この種族の居住地は前とは比較にならぬ程広く分布し、而もより大きな密度をもつのが特徴である。そのほか「青い断崖」型の居住地が現われるが、それらは天峽に拠った近寄り難い天然の砦をなしている。その中には数百戸以上の住居が保存されていた。札まごしらえの鎧の完璧な組合せ部品としての、鉄と骨を組合せた札ま(ポリツォやアムール療養所出土の如き)がしばしば発掘されるのも偶然ではあるまい。

アムール療養所附近の発掘記録による新しい埋葬方式(合口甕棺の中に骨があった)も面白い。この方式はBC

千年紀末とA Dの始めに日本、朝鮮及び印度支那にさえも広く分布したもので、弥生式土器類似の器と同様、多くの点で遠い文化的つながりを立証するものである。

初期鉄器時代の沿海地方居住地の生活の特徴づける考古学的資料は、B C千年紀末からA D始めにかけて北鮮、満州、沿海地方に居住したイロウ（訳註…挾婁族）に関する文書資料に伝わっているところと多くの点で一致している。……中略……

これは多分、その後同化された古代通古斯人と言われ、その言語を受け入れ、而も自らの古い習俗を守り、靺鞨族の起源となった沿海・アムールの住民に違いあるまい（一卷「初期鉄器時代の極東」P. 261-265）。

第二 沿海地方の考古学遺跡の絶対・相対年代に占めるベスチャヌイ半島古代居住地の地位

（沿海地方への金属文化浸透源としての赤峰第二先史文化と中国青銅文化）

沿海地方により近く住んでいたのは隣りの満州と東蒙古（つまり東北）の牧畜民であるが、これらの種族は、後に殷国が発生した黄河流域に住む、新石器時代と青銅器時代の農耕民族の最も近い隣人であった。だが勿論、それ程に近くにいながら、彼らは独特の文化、独特の文化的・人種的特徴をもっていた。多分彼らは、古文獻に東胡もしくは古代通古斯・満州人の名で知られている、後世の蒙古族の祖先と見るべきであろう。古代における彼らの文化史は二つの大きな段階に分けられ、そのいずれもが明確な特徴をもっている。

熱河の赤峰附近では、多数の小型硅石器や大型磨石器をもつ農耕民族の古い新石器文化が、時代とともに、全

ての点で本質的に異なる新しい牧畜文化に変えられて行く。赤峰の第二先史文化と同類の遺跡は熱河とその隣接の地方に広く分布しているが、これらはも早や全て青銅器時代の段階に生存した種族のものに属する。これらの種族は、南シベリヤのカラスク型セルトと形やオーナメントを同じくする青銅セルトを使っていた。……中略……石器としては、西シベリヤやヨーロッパから出る有孔の戦闘用斧槌を間近かに思わせる形の、そして西方との何らかの交流を示すかに思える有孔石斧が作られた（訳註……以下出土品、埋葬方式などの細部の記述は省略）。

赤峰第二先史文化の年代は、カラスク型セルトと殷墟出土品同様の鋳によって、BC 十五—十世紀と推定できる。これらアジアステップ地帯との交流はまた、沿海地方で作られる石器の中に独特の反映を見出した。

沿海地方への金属の第二の浸透源は先ず殷、次いで周の青銅時代の中国であった。殷時代の中国では銅と青銅の冶金は高度の域に達し、……中略……周の頃には銅・青銅器の製作は一層の発展を続けて行つた。

（沿海地方文化の特色）……承前……

然しながら銅や青銅の加工がそれ程発展完成された中国・満蒙に極めて接近していながら、沿海地方では金属器は極めて稀れで、その代りに多分、稀少高価な材料に代えて板岩製の模造品が広く使われていたのであろう。

ステップ地帯と中国との双方に接触していた沿海地方に青銅文化の発展を見なかった第一の原因は恐らく銅や錫の産地が無いこと、第二の原因は多分純政治的なものであろう。つまり肅慎や挹婁の極東諸種族が中国に対して独立の關係にあつたことと、彼ら自身の著しい自由愛好とに因るものであろう。これは「東夷」に関する中国古文獻の断片的で貧弱な記録にも見られる。中国にとっては多分、好戦的で危険なこの隣人に金属を与えることは不利であつたろうし、また彼ら自身にして見れば、自由と独立に脅威を与える殷・周時代の中国の奴隸制政權

との特に密な接触を求めはしなかったであろう。従って沿海地方諸種族は、止むを得ず金属器の代用品たる板岩製の模造短刀・穂先を用いざるを得なかった。これらの石器について言えば既に周知の如く、シベリヤや華北から出た類似の青銅器から判断して、貝塚出土の板岩製短刀の最古の原型はBC二千年紀末のカラスク・殷時代、つまりBC十四―十世紀に存在した型まで溯ることになる。

さらに後世のこの種製品は、エニセイ流域のスキト・タガル時代、中国の周時代、或はさらに降ってBC四―三世紀のものかも知れない。

私は貝塚を伴なう居住地の年代を正にこの範囲内に推定したが、これは、貝塚文化遺跡の年代推定に関与している他の執筆者（訳者…氏名省略）の研究においても認められている。

（貝塚を伴なう居住地の年代推定）……承前……

ところがこの種遺跡のより詳細で小刻みな年代区分、少なくともこれらを二つの個々の段階「(a)殷・カラスク
の青銅器と同型の板岩製品に対応する前期段階、つまりBC二千年紀後半と、(b)青銅器もしくはスキト・タガル及びパズイルイク時代の鉄器を模して板岩製短刀の作られたBC千年紀後半に相当する後期段階」に区分することの問題がいよいよ鋭く抬頭して来た。貝塚出土品の複合体コンプレックスをこの様に詳細に分類すべき必要性は既に前から感ぜられていたし、またこの問題は短期間に結論しなければならぬというそれ自体の歴史を持っている。

この百年間に多くの研究家が行なった貝塚居住地の撓まざる調査の結果、量的には多くの物的資料が集められたが、……中略……豊富な、だが同時に一樣なこの資料では、その全てを以てしても、これを更に細分したり、容器や石器の形状の変遷の年代的連続性を解明するための確乎たる資料は得られなかった。そのためには何より

も先ず明確な層位学的データに欠けていた。

貝塚出土資料を全体の形において、より新しいかより古いかに分けることの可能性の問題を先ず提起したのはア・イ・ラジンで、彼は「貝塚層の下層で最も単純なオーナメントの陶器に出くわす」との着想を発表した。だがこの説は、具体的な観察やその後の研究による確証を得るに至らなかった。

色々な場所に無意味に積み重ねられた僅かな発掘物を基礎に貝塚からの出土資料を年代的に分類しようとしたゲ・イ・アンドレーエフの試みも成功しなかった。

ペ半島の居住地1の全部ではないが少なくともその大部に亘って連続実施した発掘の成果は、前記の結論が時期尚早で無根拠な性質のものであったことを余すところなく明示した。この居住地の膨大な物的資料も、ゲ・イ・アンドレーエフ提案の、貝塚文化を「新」と「旧」の段階に区分する方式を確証するには至らなかった。あれこれの「段階」の要素は案の定一か所に混在しており、而も多くの場合「新しい」ものが下方すなわち住居の底部に、また「旧い」ものが上方すなわち芝草の真下に層をなしていた。……中略……ペ半島居住地の全てを二つの虚妄の「段階」のいづれか一つの枠に設定することもまた不可能である。

にも拘らずペ半島における発掘、特に一九六〇年のそれは、この問題の提起のためだけではなく、全く新しい見地における極めて重要な資料を与えてくれた。発掘は予想外な、一見解釈不可能な事実をもたらした。既に一九五六年に住居3（訳註…以下住居3、7、12等の数字は居住地1の中の個々の住居の番号である）の貝塚層の最上部で、明確な特徴の無い、保存の良い棒状の鉄製品が出た。一九六〇年には又もや今度は鉄棒のほかにソケット付きの鉄セルトまでが出た。鉄（鑄鉄）製セルトは住居7と12で発見され、その一つは完全に、他は僅か部分

的に保存されていたが、いずれも同一形状のものであった。……中略……ペ半島出土の鉄セルトの寸法形状は、
 貔子窩^{ピッワ}と牧羊城^{ムンギョウ}で発見されたベン型の古代中国の青銅製や鉄製のソケット付きセルトに似ている。

貔子窩^{ピッワ}出土の鉄器の試料を特別に調査した斎藤大吉氏はこれらを白鉄製と見ている。彼は、中国の鉄の鑄造技術はこれに先行する青銅器時代の冶金の実績から直接発展したもので、ヨーロッパの鉄器鑄造は僅か六百年の歴史しか持たないので、貔子窩^{ピッワ}出土のものは世界最古の鑄鉄製品の典型と見ている。……中略……日本の考古学者は、この種鉄器は、この地に新石器文化がその最終段階において依然として生き永らえていた頃のものであると見ている。全体としてこの残存新石器文化の全てを、浜田耕作氏は「金石併用文化」と定義している。……中略……

斎藤氏は、貔子窩^{ピッワ}出土の鉄器が前漢時代のものであるとする推定において、浜田氏の説に従っている。因みに浜田氏は、これら鉄器がBC二―一世紀すなわち前漢時代のものであるとの推定の根拠を、同地で伴出した同時代の貨幣に求めている。然しながら日本の考古学者達の発掘の性格から言って、この無条件の結論を確証あるものと見なすことはできない。彼らが立脚しているこの結論を基礎にした南満州文化史の一般概念もまた正しいと認めることはできない。われわれにとって今重要なことは、ペ半島居住地の住人は青銅のみならず鉄をも知っていたと言ふこと、石は彼らの生活の中で、逆説のように鉄に結びついていたと言ふことである。

然しながらこの際考慮しなければならないのは、鉄が六〇年に調査した住居（すなわち五六年に調査した中心部の住居集団を取り巻く外周部の住居）の特定のグループの層内で見つかったという点である（住居7―第二層でソケット付きセルトの破片、底部と第三層で破片、第三層で小棒。住居12―第二層でソケット付きセルト）。五六年発掘の際には、調査した住居1―5の深部では一この鉄器も出なかった。その時発見されたのは若干の鉄細工品だけで、

それらの由来は疑問のまま残されていた。

われわれの見るところでは、外側（縁端部）の住居は内側（中心部）の古い時代の住居に明瞭に依拠しているが、この居住地の地質学データと共に、鉄器のこのような分布は、この古代聚落の住居の年代分類のための決定的な準拠となる。鉄器の存在するのは住居の底部で、年代のより新しい縁端部の住いの中に限られている。つまりそれらは実際に住居1・5よりも新しい年代に属する。このような結論は他の考古学遺跡におけると同様、基本的な意義ではなくともあらゆる場合に極めて重要な意義を持つ大量の資料（陶・土器の破片）そのものの分析によっても裏付けられる。

総じてこの大量の陶器（黒または茶色っぽい塗料の模様画のある容器をも含めて）は、居住地のどの住居どの層のものも嚴重に一貫して一様な形状を持っていて、これらを製作技術、形状、オーナメントの手法・テーマなどによって、或る個々の年代のタイプと種類に峻別することはできない。これらの陶器は、最古の中心部の住居から新しい住居に至るまでのペ半島の古代聚落で生活が営まれた時代の全期間において、大きな変革や急激な変動無しに存続した、完璧な文化物の複合体と見なければならぬ。

のみならずこれら陶器を共通の一様な背景として、新住居群からの出土品をより詳細に研究することによって、これらを旧住居の出土資料と区別する若干の部分的特色が見出される。このような特色をもつものとして先ず挙げられるのは、上縁の外側沿いに、蛇腹形に出張った鋭い肋骨様の突起を持つ容器である。この種の容器は、沿海地方の初期鉄器時代末期の居住地から出た容器、つまり靺鞨時代の陶器を想起させる。このような靺鞨陶器とのつながりは偶然でなく、恐らく靺鞨文化と貝塚居住地主民の文化との間の、何らかの起源上の関連を示すもの

と考えねばならぬ。

殊に面白いのは、この陶器が北鮮のオドンでの発掘の際の出土品（それは文化の面でも年代的にも沿海地方の貝塚時代住居と一致するチョード島居住地の類の遺跡に、年代的に直接続く特殊な文化史的段階に属する）に類似しているということである。……中略……

新住居群の陶器の中で独特の地位を占めるのは、例えば住居8で発見された、漏斗状の幅広い上縁をもつ容器の断片である。このような上縁は幾分かアムール療養所（ハバロフク近郊）附近、マルムイジ、ビラ河畔ナイフェルド部落（ユダヤ自治州）附近、セニキナシャープカ（ウスリースク市近郊）などの居住地から出た容器を想起させるが、ただペ半島出土の容器の漏斗付き上縁の特異点は、右記のアムール・沿海地方の容器に比べて、その形状が細くて単純なことである。……中略……

この故に、ペ半島の居住地、同時にまた貝塚文化遺跡の年代推定の問題は一般に著しく複雑となる。既述のことから得られる結論は、「ペ半島の住居は、一つでなく二つの継続する年代の段階に属すると見なすべきだ」と言うことである。この場合の二段階は、分類上の特徴についても歴史的内容についても、ゲ・イ・アンドレーエフが輪郭付けようと試みた「段階」とは無縁のものである。ここに言わんとするところは単純なこじつけの物の「エクスビシツィン発展」に関する事ではなく、沿海地方の古代居住地の生活における重要な変動についての話であり、考古学的資料の風貌の変化を決定的にさえる大きな歴史的事件に関する事である。

第一の段階を特徴付けるのは彩陶並びに貝塚文化の居住地特有のその他の全ての特徴（横断面が直角、稀れに円形の磨石器をも含む）である。ペ半島出土の彩陶はこの場合、その源において東アジアの新石器時代に深く溯り、

仰韶文化及びこれと源を同じくする東北—沙鍋屯洞窟文化と赤峰「先史文化」に溯る、古代文化の伝統の最も明瞭かつ特徴的な現われと見なさなければならぬ。ペ半島の陶器は全ての点で（技巧面でもスタイル面でも）南満州新石器時代の彩陶の発達線の延長である。

第二段階では、この文化は安定した存在を続けるが、その中には既に鉄器時代独特の新要素の混在が現われる。それは先ず第一に鉄そのものであり、同時に、この陶器を朝鮮のオドン（会寧郡）出土の容器やアムール地方、満州、沿海地方の靺鞨族の塚や居住地から出た容器に接近させる新しい特色である。

第一段階、同時に中心部の旧住居群は先に推定したように、よしんばBC二千年紀後半までは行かないにしても、いずれにせよ千年紀と二千年紀の境（およそBC十一世紀）と推定できよう。

第二段階とこれに比定される居住地東北縁端の住居の年代推定は、その住居出土の鉄器の年代によって決定される。これら鉄器の絶対年代並びに、沿海地方とこれに隣接する我が極東諸地方における鉄の最初の普及時期を決定するために特別な重要性をもつのは、チャピゴウ河谷とセミピャトナヤ滝の初期鉄器時代居住地の調査結果である。ソ連邦科学アカデミー考古学研究所レーニングラード支部放射性炭素研究室でのC¹⁴法による炭素分析の示すところによると、セミピャトナヤ滝居住地はBC十一—十世紀と推定されている。もしこの年代を採択するならば、沿海地方における鉄の出現と鉄器文化の始めはBC千年紀頭初のことではなければならない。

それどころか、セミピャトナヤ滝居住地の炭素分析による推定に基づくなら、ペ半島の新住居群出土の鉄器は十一—十世紀よりも更に古い時代のもので推定しなければならない。これらの鉄器はセミピャトナヤ滝居住地に先行するものに違いない。けだしペ半島にはまだ、側面に把手のある容器の一かからも無いし、またセミピャト

ナヤ滝やチャピゴウの上層に独特なその他のいかなる物件も無いからである。

この点から推して、始めて鉄器の現われたペ半島の新住居群は、BC二千年紀と千年紀の境目、多分BC十一世紀に溯ることになる。

この結論は一見信じ難い程予想外であって、従来一般に認められて来た「ソ連領極東では鉄はBC千年紀末より溯ることはなく、むしろもっと後れて、BCとADの境目に現われたであろう」との観点と著しく矛盾する。この伝統的観点は、未だほんの三十年代に日本の考古学者が南滿と朝鮮で行なった大規模な調査の結果、彼らによつて最も明確に立てられたものである（訳者…以下原文では、滿州と朝鮮の古代史に関する日本の考古学者原田淑人、駒井和愛、三上次男諸氏の見解を述べてこれに反論しているが、紙幅の関係上割愛する）。

（北鮮考古学者の新説）

朝鮮とその隣接諸国の古代民族の鉄獲得の歴史に関する、全く新しい異色の見解を最近に発表したのは、朝鮮人民民主主義共和国の学者達である。彼らは国の独立後、ドルメンや石槨の考古学遺跡の研究に関して大きな業績を立て、また特に重要なのは精力的に居住地の調査にも取組んだことである。これによつて彼らは、朝鮮の金屬普及の歴史（銅から鉄までの）に関する数多い、原則的に全く新しい結論に達した。これらの研究成果をまとめたのは、朝鮮の先史巨石文化とその起源の問題に特別の配慮を割いたトューホー博士（訳者…以下都氏と略称）である。都氏はドルメンのみならず、古くは「角」と言われた乳房形容器を出した居住地をも先史巨石文化の中に入れてゐる。……中略……都氏は、朝鮮の金屬文化は南方に起源を持つと考えており、これを東南アジアと華南に結び付けてゐる。……中略……都氏のデータによると、初期鉄器時代は南鮮でも北鮮でも、朝鮮北部とくに

西北部が原始社会の枠から出てここに国家が形成されるBC三―四世紀である。これを立証するのは、北鮮独立後新たに発見された、BC百八年の「漢四郡」成立に先立つ、而も戦国型の中国遺跡とは異なる考古学遺跡である。そこでは細幅の青銅短剣・槍先、刃部の弯曲した戟、馬車の附属品、細線模様のオーナメントのある鏡、「花瓶形」容器、鉄斧、鉄鎌が出た。都氏はこれら出土品（主として墓穴からの）を古代朝鮮のものであるとしている。都氏の結論は、朝鮮の金属期をBC千年紀深く溯らせる。新しい考古学的発見に基づく彼の見解によると、朝鮮では、日本の考古学者が考えていたよりも遥かに早く鉄が普及していたことになる。

（中国での鉄器使用の始期に関する見解）……承前……

これに関連し、極東と地続きの中国に鉄が現われた時期に関する問題も重要な意義を持つ。製鉄業普及の時期は多くの学者が考えていたよりも早いという説を立証する、中国の黒色冶金に関する若干の事実を引用しよう。

極東地方の技術と冶金の歴史に関する文献では、中国における鉄普及の問題は長いあいだ不明のまま残されていた。漢時代の中国の経済と文化の進歩の根底にも政治生活においても、広汎な鉄の採用があったという一事は疑う余地は無いが、新しい金属のこの広汎な普及には、いかようかの過渡期、鉄の原始開発期、この国の古代住民の技術と生産生活への鉄の浸透の時期が、必然的に先行したに違いない。

中国に鉄が現われた時期に関する問題を解くためには、中国における鉄と製鉄の歴史に関する概念を与える、文献と物の両面からの考古学的資料を導入する必要がある。中国で鉄が完全に青銅を征服したのはBC三―二世紀、すなわち秦及び前漢の時代であることは一般に周知の事である。……中略……

ところが最近完全に明らかにされたところによると、中国ではBC三世紀どころか、BC四―五世紀から六世

紀をも含めて、戦国期に相当広く鉄が普及していたと言われている。管子の「女には鍼はりと小刀、農夫には手ぐわと犁、旅人には斧、鋸、錐、鑿うぎが必要である」（訳註：管子海王第七十二）の記述が河南省輝縣（訳註：一九五〇—五一年に発掘）と熱河からの出土品によって確証されている。因みにそこでは秦時代どころかもっと溯った戦国期つまりBC五—六世紀頃の鉄器が大量に発見され、同じ頃のものと思われる労働用具製作用の鉄范も出ている。

BC五世紀頃とされるものに、伝説に言う鉄剣を作った刀匠に関する資料がある（訳註：吳越春秋の干将かんしょうを引用しているが省略。但し干将莫耶の剣は青銅剣という説もある——関野雄「中国考古学研究」P. 218—220）。

なお非常に面白いのは、ベ・カールグレンが管子から引用した資料である（訳者：以下カールグレンが管子の記述を高く評価していることを述べ、さらに管子輕重乙第八十一、同輕重十を引用して、「鉄使用の時代はBC五—六世紀すなわち戦国期だけではなく七世紀をも含む。BC七世紀に広く鉄が使われていたと言うことは、これに先行する鉄加工術普及のための長い期間が必要であったことになる」というカールグレンの見解を紹介しているが訳文の詳細は省略）。

面白いことには、鉄の最古の記録は中国最古の文献詩經に出ていて、それには「駟しやう驥き」と題して、暗灰色の四頭馬に馬具を付ける一篇がある。古註にはこれを「鉄の色」としている。ジェイ・ニードハムはこれを齊しやうの襄公の治世（BC七七六—七六四）の頃に推定している（訳註：齊しやうは秦しんの誤りではないか。詩經秦風篇に秦の襄公を美める詩「駟驥」がある。駟驥とも書く。「深黑色帶赤者謂之駟驥」駟驥、四馬皆黑色如驥也——漢和大辞典）。

著名な中国研究家エ・エルケスは、鉄はBC七世紀には大量に使われるようになったが使用の始期は遙かに古い、と見ている。彼は詩經の記述から判断して、鉄は中国ではBC八世紀でなく、既に殷帝国が周の諸公によって滅ばされかけた頃、つまり恐らく十一—十世紀には知られていたであろう、と見ている。彼の説のように、「鉄器は

既に周王朝の中国制覇にあたって決定的役割を演じた」かも知れない。

より広い歴史的立場から全般情勢を考慮すれば、殷・周時代の境目に中国に鉄器が現われたとしても何ら驚くには当たらない筈である。ニードハムが、「キッツバット出土の短剣の鉄の剣身のことを書いたヒッタイト王ハットゥシル三世の有名な書簡は、BC一二七五—一二五〇年、すなわち中国では殷商時代と推定される」と示しているのは正しい。

以上の事実は全て、中国では黒色冶金が何千年という歳月の間に独特の過程を辿って発展したことを証明しており、中国の鉄加工は深い歴史的起源を持ち、事実BC二一千年紀の境目に起り得たことを確認している。

(貝塚時代の沿海地方、東南アジア、台湾、日本列島 ……承前……)

中国における鉄の生産の普及に関するこれら全ての事情に加うるに、セミピャトナヤとキーロフ部落から出た炭素の放射性分析結果を考慮すると、別途また「沿海地方における鉄の出現に関する問題」と「極東諸種族の歴史と経済生活にとって、鉄の出現がいかなる意義を持つかという問題」を採り上げなければならない。この問題の新たな提起は、BC二一千年紀の沿海地方文化史と、この地方の石から金属への転移の過程とに関する現行の構想の再検討を余儀なくさせる。

既に見て来たように、隣りの中国では銅と青銅の冶金が高い水準に達し、文字が生れ、奴隸制国家が出来上がったというのに、沿海地方では見るとおり貝塚文化が存在していた。隣接の中央アジアのステップ地帯やシベリヤのタイガでも、遙か以前に青銅器時代が始まっていた。

丁度その頃、東南アジアと台湾から日本に至る太平洋諸島には特殊の事情が生れつつあった。アジアのこの地

域は「種々の旧式の要素や、発展テンポの速い先進諸国では既に《落ちこぼれた》型の物質文明」の蓄積された独特の貯蔵所であった。沿岸の種族や島の住民は幾分かは農耕や牧畜にたずさわっていたとは言え、大部分は長い間漁撈や採集の原始生活を続けていた。彼らの間で銅や青銅の冶金の発展が緩慢であったのは多分、鉱物資源、開発に便利な銅や錫の産地に乏しいかそれらが皆無であったからであろう。従ってここでは石器が長く保たれ、自らの手で行なう冶金は存在しなかった。

このような状況を明らかにしているのは正に、台湾の最新の考古学研究ならびに日本における弥生時代の研究である。とは言うものの、ここでも進歩的発展の過程は漸次進んでいた。その土地の居住者の生活に、多くの点で隣接諸国の影響によって刺激された、而も同時にまた独特の内部要因を持つ各種の変遷が起った。これを確証するのは、遙か以前の縄文文化とは異なった弥生文化の特徴、或いは遙か後世の第二文化とは異なった台湾の第一特殊新石器時代の特徴である。

その第一の証明は新種の土器の分布であり、第二は金属器の原作を模した石製用具・武器の出現である。

チョード島やペ半島の型の居住地と同時代の沿海地方においても、さらにはその隣りの朝鮮でもそうであった。到る所に新型の容器、先ず第一にアムフ・オラ型の器、さらに台付きの浅い皿型の器と深皿が現れた。

われわれはまた、貝塚時代つまりBC二千年紀後半と千年紀におけるこれら地方の居住者は既に金属を知っており、また金属器を板岩に模写しただけでなく、輸入品の銅や青銅の装具や武器を手中に収めていたことも見た。それにも拘らず沿海地方ではまだ今のところその土地で作られた型の青銅器も無いし、その土地での銅・青銅器の製造痕跡は現れておらず、鋳物工場、鋳型その他明白なその土地での冶金の証拠は発見されていない。この

ように、これはまだ全くの新石器文化であつた。だが同時にこれは、幾世紀か前に存在した文化とは全く異なるものであつた。

(沿海地方古代文化の地位) ……承前……

われわれは既に、沿海地方種族の生活の中に、彼らの文化が多く、点で以前とは異なる性格を持つに至つた本質的な進歩的變動が起つたことを見た。このことは、仰韶文化陶器に似た、さらに龍山(城子崖)文化や商殷文化陶器にはさらによく似た新容器の分布自体が証明している。最も重要な出来事は、新しい文化要素すなわち銅だけでなく鉄が時代と共に古い新石器制度の中に浸入して来たことである。そして青銅のなし得なかつた事を、恐らく新しい金屬がなし遂げたであろう。

この際考慮すべきは、鉄加工の技術は、技術と文化の大変革を意味するその他の重要な発明と同様の段階を踏んで普及したということである。それは後世の銃砲や馬鈴薯の使用がそうであつたように、種族から種族へ、民衆から民衆へと伝わって行つたのであつて、この発明の源との直接の接触は、(政治的交流も、戦争や住民の大集団の移住も) 必要ではなかつた。多くの場合この過程は、好適な一般環境によつて非常な速さで生起して行つたことも極めて当然のことである。

つまり多分、極東における鉄の普及は、目下のところわれわれにはまだ不明の或る中心からもたらされたと推定すべきであろう。実際、鉄の存在は最初の間はその土地の住民の全文化の相貌を些も変えることはしないし、またそれ自体住民の歴史に反映することもない。この文化は最も本質的な姿でこれまでの新石器文化として留まつている。ところが暫くすると鉄は己れの全ての力を暴露して、何よりも先ず農耕作業、建設作業のような重要

な経済部門に奉仕する生産用具を作るための材料として、技術面に指導的役割を持つに至る。……中略……鉄の使用は労働生産性の向上に急変をもたらし、沿海地方種族の経済の急速な進歩を促したに違いない。

沿海地方種族の経済生活への鉄の普及の意義を評価するため、メラネシアのバギオ島民の生活から一つの人種誌学的アナロジーを引用しなければならない。ここでは貝塚文化人とはば同様の原始農業が十九世紀まで行なわれ、そして正にその頃に石斧から鉄斧への同様の移行が起った。……中略……

この事はやはり、沿海地方の古代住民の社会関係と文化のその後の発展のためにも意義を持たざるを得ない。鉄斧を装備された農夫は先ず第一にウスリーや沿海地方のタイガの世紀のジャングルに大規模な攻撃を挑み、自分達の部落や堅固な避難所（中世の都市の芽）を建設できるようにになった。同時にその後の生産力の向上により、社会生活における決定的な変化（原始共同体から階級社会への変化）の途が開かれた。つまりそのような事件の推移は、旧石器時代に始まり、靺鞨時代（この時代からこの地方で始めての国家——渤海人と女真人の——への真直ぐな途が通じている）に至る遺跡が如実にこれを物語っている。

ここから、ソ連領極東の歴史における貝塚文化の地位の、以前とは異なつた評価が生れる。

既にこれまで見て来たように、頭初、沿海地方の貝塚時代はエム・イ・ヤンコフスキーやヴェ・ペ・マルガリートフの言う極めて明確な観点から評価され、これら最初の研究者は（彼らに続くア・イ・ラジン、ヴェ・カ・アルセーニエフ、エリ・イ・イワニーエフ等をも含めて）、「他の隣接諸国の住民に比べた、貝塚時代の沿海地方住民の文化の原始性と極端な後進性」を結論した。独特の自家撞着と矛盾をもつこの古い見解を、ゲ・イ・アンドレーエフも最近まで守り通して来た。

一面、原始的な貝塚時代文化と、反面、中世における沿海地方住民の文化の華やかな開花との対比は、前記の見解によれば非常に突飛で、この双つの歴史時代はお互にかけ離れていて、何か大きな深淵によって隔絶されていたかのである。沿海地方の高い中世文化は、その土地の種族の過去に、自らの発展のための何らの地域的な起源も前提も持っていないで、それは沿海地方の歴史においては将来のため何等の帰結をも持たぬ、或る偶然的のエピソードと考えられていたに違いない。この見地からすれば、沿海地方にとって渤海や女真の文化は、未耕の荒地に偶然現われた印象的で珍奇な植物に過ぎなかったのだ。

今や茲にわれわれは、百年を頑強に支配して来たこの古い見解が、実際の資料に適応しないことを、完全な確信を以て明言することができる。

この辺境の歴史上明確かつ極めて重要な段階（つまり、その後の経済、社会構成、文化のより高い段階——階級社会と国家——への移行を準備した沿海地方住民の生活における、極めて進歩的変化の時代）が、沿海地方沿岸部の貝塚居住地によって現実に呈示された。

わが極東の歴史におけるこの段階の意義は、もしこれをより高い文化的地理的背景において観察すれば一層はつきりするであろう。アジア民族文化史研究家にとっては既に早くから、ソ連領極東並びに隣接のシベリヤと蒙古のステップ地帯における基本的文化段階の相互関係に関する問題が提起されていた。

シベリヤの大部とその隣接諸国にとっては、新石器時代から青銅文化へ、青銅から鉄へという、技術と文化の正統的な発展の途が特徴的である。沿海地方では、三つの大きな文化史的段階を辿るそのようなならかな漸進的発展の代りに、発展のテンポにおいても質的内容においても独特の、極めて特色ある歴史的過程が見られる。

BC二千年紀には既に沿海地方住民に青銅器が知られていた。その起源（はっきり言って二つの起源）も判明している。つまりその一つはフンの祖先もしくは通古斯・満州人に属するBC二一千年紀の東北（赤峰第二文化、他の一つは蒙古とシベリヤのステップ、つまりザバイカルと西シベリヤの文化である。それにも拘らず土地の種族は、青銅が彼らの生活に少しの重要な影響をも与えないまま青銅器時代を經過していった。事実彼らはこの文化史段階それ自体を経験することなく、石から鉄への移行によって、漸く彼らの真の新時代が始まった。新石器文化レベルの石器時代が、ここではBC二千年紀末まで続いた。

伝統的見解に従えば、以上の事から、完全に銅を我が物にし、最古の金石併用期に始まり新しい青銅器時代に終る青銅文化の全段階を経験した隣接諸族に比べると、極東の種族の文化の後進性と緩漫さが結論されよう。

例えば北アジアの場合、古典的な銅・青銅文化源たるミヌシンスク盆地の住民もそうであった。だが「エニセイ上流流域の青銅文化の開花は後カラスク期つまりタガル文化またはミヌシンスク・クルガン文化（BC十一世紀）の初期段階に属するが、その地方に鉄が普及したのはBC三―二世紀である」という通常の考え方からすれば、「ミヌシンスク地方のタガル族は極東の同時代人より遥かに後れていた」との意外な、最初の見解に対し逆説的とさえ言える、而も不可避の結論を出さざるを得なくなるであろう。

エニセイ地方では二千年前と同様依然として銅と青銅が基本的工業原料として残っていたというのに、極東では既にBC千年紀初め、十一世紀には鉄が技術的発展の基礎となった。だが問題をこのようにきめ付けるのは極めて浅はかで単純であるかも知れない。ミヌシンスク盆地での比較的遅い青銅から鉄への転移は（勿論大多数の研究家の採る観点に立つ場合）、その地住民の何らか宿命的な文化的緩漫性によってではなく、早く高いその地の

青銅文化の開花を条件付けた、同時に鉄への転移を後らせた特殊の複雑な地域的条件によってこれを説明することが出来る。エニセイ地方と西シベリヤ地方には採取容易で豊富な非鉄金属の鉱床が多く、早くから、既にアンドロノフ・カラスク時代に青銅冶金が高い水準に達し、古代の冶金工の生産の伝統が出来上っていた。

だが、また具体的に言えば、この故にここでは新しい技術、新しい金属たる鉄への転移のそれ程さし迫った需要も無かった。銅と青銅の加工の高い水準は、その後の金属開発技術の発展を促進するよりもむしろ阻害した。逆に沿海地方種族は石器時代から一挙に鉄器時代に進み、考えられぬ程の速い速度でこの転移をやつてのけ、また鉄自体は異常な速さと広さで彼らの文化と経済の中に普及し、而もエニセイ河畔ステップ地帯の銅よりも著しい深い変化を彼らの生活の中にもたらした。

沿海地方における早い鉄の普及は、恐らくこの地方の住民だけでなく、その地方の隣人（チュクチャカムチャツカまで）にも影響を与えたであろう。少なくとも鉄の存在はチュクチ半島でも意外に早く発見されている。……中略……鉄はまたこの極東の源からヤクト北部や沿バイカル地方、中部レナ地方へも浸透し得たであろう。この地方では沿エニセイ地方とは判然と独立した、非常に早い独自の鉄器時代が発生している。……以下略……

（訳者…以上ア・ペ・オクラドニコフ、一九六三年）

第三 ペスチャヌイ半島出土セルトの組成の分析結果（訳註…ソ連科学アカデミーの分析結果の要約）

セルトから採つた試料のスペクトル分析の結果、二つのセルトは極く微量の不純物を含む鉄で出来ており、Cu

Mn、Si、Ca、Al、の痕跡を見る。鋳物であることは肉眼で判るが、保存が悪いため機械的加工の跡は見られない。検鏡用磨片の顕微鏡検査によると、セルト一号の場合は灰銑の特徴をもつ構造が現れたが、全面的に構造がやや不均質である。

セルトの末端部の断面の微小構造を見ると、端の方に酸化物、次で純粋フェライトが見え、さらに中心部に近く黒鉛が現われている。検鏡用磨片の中心部には板状黒鉛の典型的構造が見られる。中心部では、セメントタイトの大型薄板を含む僅かな板状パーライトの検出に成功した。銑の表層内の黒鉛の量の少ないことは、鋳造品が表面から脱炭されたこと、つまり鋳造後に酸化環境内で適度に加熱されたことの証左である。恐らくこのために鉄鉱石を利用したのであろう。加熱によって表層内のCは焼尽したが、中心部ではセメントタイトの部分的崩壊が起り、生成炭素は板状黒鉛の周囲に集中した。灰銑に特徴的なセルト一号の構造の調査によると、鋳造は緩冷条件で、つまり土范を用いて行なわれたと見られる。機械的加工は多分なされていないであろう。

セルト二号では、表層の或る部分にフェライト＋パーライトの構造が見られる。中心部は白銑の特徴的な構造（セメントタイトとレデブライトからなる金属基體）を持っており、表層を徐いて、セルトの片面はひときわ目立った過共晶の構造を持っている。

レデブライト（80％）とセメントタイト（20％）の占める面積の計算によって銑中のC含有量の算出ができたが、それは四・七六％であった。

過共晶の白銑の同様の構造は通常その中に大量のMn（10％まで）が存在する場合にあり得るか、或いは急冷によって生じる。スペクトル分析は二号の調査においてMnを検出したものの、その含有量は1％以下なので、二号

は冷却された金属^{い、}範を用いて鑄造されたと見るべきである。補足的な加工の跡は見られない。
微小硬度の測定の結果は次のとおりである。

セルト一号

外層——フェライト——三二六、一一六、一二二、一二二 H_B 。平均一一九 H_B 。

内層——フェライト——一一六、一〇五、一二二 H_B 。平均一一五 H_B 。

パーライト——二〇〇、一九三、二五四、二〇〇 H_B 。平均二二四 H_B 。

鉍滓、酸化物——一五〇——一〇〇。

セルト二号

レデブライト——五七二、五〇〇、五〇〇 H_B 。平均五二四 H_B 。

セメントライト——六二四、八〇〇 H_B 。平均七二一 H_B 。

パーライト（余剰のセメントライトを含む）——二二一、二五四、三二二、二五四、三〇〇、三二〇、二九七 H_B 。

平均二八〇 H_B 。

鉍滓、酸化物——二三六——一〇〇。

現代銑（イ・エヌ・シムイコフ。一九五六年。テルミット熔接工便覧）

フェライト——八〇——一〇〇 H_B 。

セメントライト——七四五——八〇〇 H_B 。

レデブライト——六〇〇 H_B 。

このように、古代の職人達はいろんなタイプの銑の製造技術を知っていて、その高い硬度を得ることに成功していたと見ることができる。

古代の鉄セルトの製造技術に関する公表資料中強調すべきは、BC一世紀と推定されている貔子窩^{ヒッポ}出土の鉄セルト破片の微小構造と化学組成の研究に献げられた齊藤大吉氏の労作である。われわれが得た資料と齊藤氏の資料とを比較して見ると、銑（セルト二号）の組成が近似しているだけでなく、最も重要なことは、調査対象の微小構造に現われた製造方法が同じだと言えることである。

結論 一、推定される時代（BC九―五世紀）には白銑と灰銑を得る方法が知られていた。

二、土範（セルト一号）と共に金属範（二号）も用いられていた。

（ボグダーノワ・ベレゾフスカヤ、ベ・ベ・ギンツブルグ、デ・ヴェ・ウナーモフ）

訳者付言：

なお本資料と関連して「古代日本の鉄器文化の源流に関する一考察」と題する小論文を本学教養部紀要第十二号に掲載したので御参照願いたい。

附 図 南 沿 海 地 方 古 代 遺 跡 分 布

